

(吉野山)

## 奈良・石神遺跡

いしがみ

1 所在地 奈良県高市郡明日香村飛鳥  
2 調査期間 第一九次調査 二〇〇六年（平18）一〇月～一〇  
○七年五月

3 発掘機関 奈良文化財研究所都城発掘調査部  
4 調査担当者 代表 異淳一郎  
5 遺跡の種類 宮殿・官衙跡  
6 遺跡の年代 飛鳥時代

### 遺跡及び木簡出土遺構の概要

石神遺跡では、一九八一年以来の継続調査により、A期（七世紀前半～中頃）、B期（七世纪後半）、C期（七世纪末）の遺構群を検出している。遺跡が最も整うのはA3期で、齊明朝の公的饗宴施設として使用されたが、B・C期には官衙的な様相を呈する。第一九次調査区は、石神遺跡の主体となる建物

11

群の北外周部で、木簡が多数出土した第一五・一六・一八次調査区の北隣である。調査面積は八七〇m<sup>2</sup>。検出した主な遺構は、阿倍山田道・溝・沼沢地・堰状施設・杭列・礫溜まりなどである。遺構は。

五時期あるため、従来のA～C期ではなく、I～V期に分けて記す。

I期（七世紀中葉以前）は調査区に谷が入り、西側には沼沢地SX四〇五〇が広がり、その内部に堰状施設SX四一六二が設置されている。東側の微高地には斜行溝SD四一六〇を掘削する。II期（七世紀中葉～後半）はSX四〇五〇・SD四一六〇を埋め、阿倍山田道SF一六〇七をつくる。SD四一六〇には七世紀中葉の飛鳥I新段階の土器が多数含まれ、阿倍山田道の建設はこの頃となる。道は盛土工法で構築され、基礎部分には敷葉工法が用いられていた。こ

うして路面を盛土した後、南側溝SD四一七〇を掘削する。その南

側には、第一五次調査区から続く南北大溝SD四〇九〇が屈曲して西に流れる。これまで大溝の掘削時期は七世紀後半のB期としてきたが、道路の盛土が大溝北岸となる堤の役割を果たすため、七世紀中葉に遡る可能性がでてきた。III期（七世紀後半）はSD四一七〇・四〇九〇を埋め、東西溝（阿倍山田道南側溝）SD四一七五、南北溝SD一三四七Aを設けてT字状に接続させる。IV期（七世紀末）はSD四一七五・一三四七Aを埋め、東西溝SD四一八〇・四一八五（阿倍山田道南側溝）、南北溝SD一三四七Bを掘ってT状に接続させる。北側の山田道第一・三次調査では、この時期の北側溝

とみられる東西溝が検出されており、路面幅約一八mと推定である。

V期（奈良時代～中世）には南北溝SD四一八九、礫敷SX四一五五・四一五九などがある。

木簡は、SX四〇五〇埋立土から一点、SD四一六〇から五点、

SF一六〇七造成土から一点、SD四〇九〇から一二点（うち削屑四点）、SD四一七五から一点、SD四一七五埋め立てに伴う周辺整地土である暗灰褐色粘質土から一点、SD四一八〇から二点、SD四一八五とSD一三四七Bの合流地点から一点、SD四一八九から四点、現代暗渠から一点、V期以前の茶灰色土から一点、計三四点（うち削屑四点）が出土した。釈読可能な一二点を紹介する。

## 8 木簡の釈文・内容

### 斜行溝SD四一六〇

(1) □□女丁大人丁□取□久□〔意カ〕  
〔御カ〕

(355)×21×6 081

(2) 「△大家臣△大人△首大△」

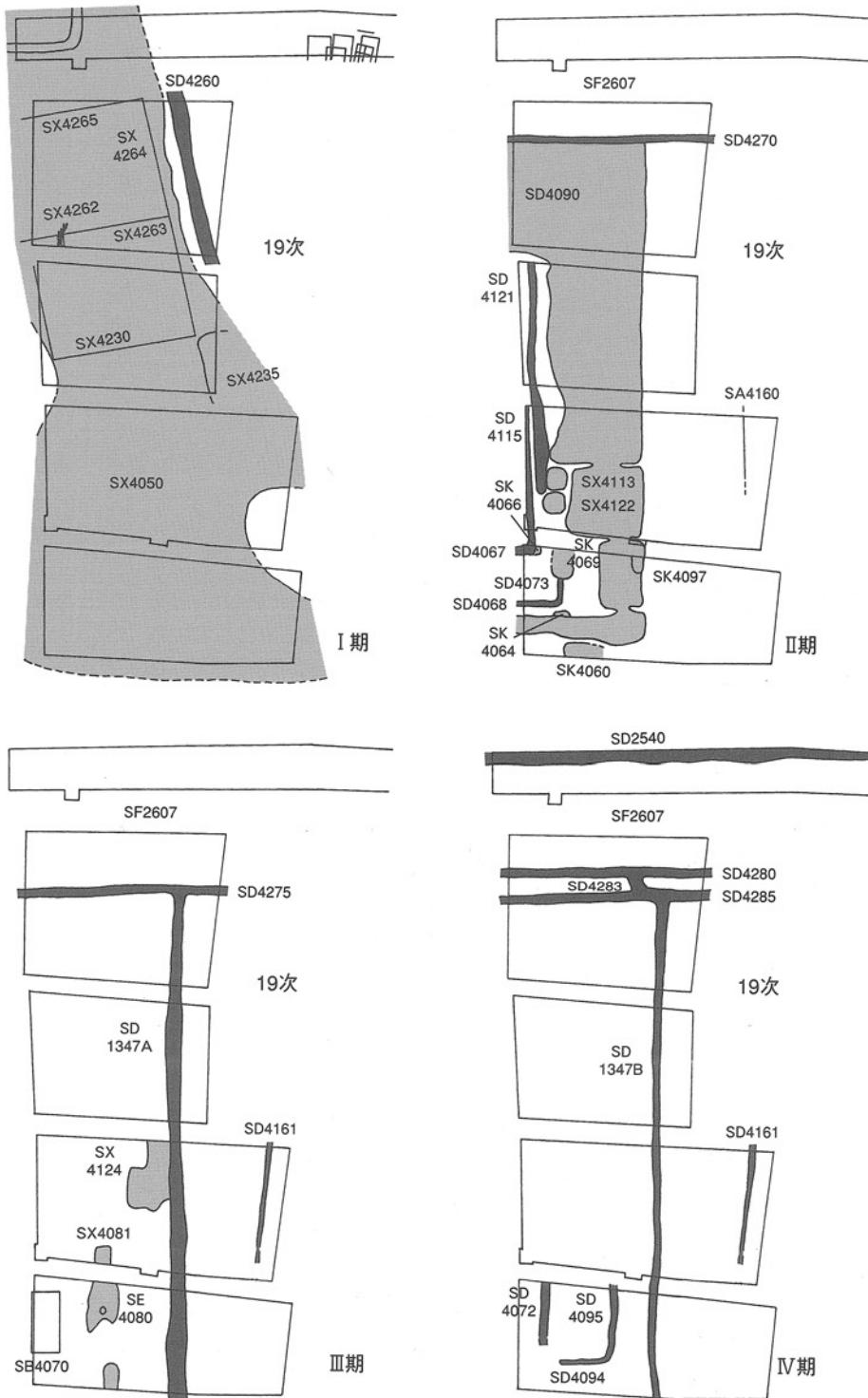
(57+31)×18×3 032

(3) 「△十五斤」

・「△『□□□□』」  
〔思カ〕

112×24×4 032

2007年出土の木簡



石神遺跡北方遺構変遷図

(4) 「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」 (刻書)  
□□天

(4) 「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」 (刻書)  
□□天

・「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」 (右側面、刻書)  
天大五」

天大五」

道路の<sup>ル</sup>一六〇七

(10) ×廿七人 沙弥六十

(115)×(48)×4 081

(11) 「棕<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>棕<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」

東西溝〇〇四一一七五

46×57×35 065

(12) 「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>尾□

77×31×6 033

暗灰褐色粘質土

「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>弥阿<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>腰<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」

108×34×5 032

(5) 「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>天于」

(13) 「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」

・「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>天王」

・「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>詠佐加五十日」

229×86×12 065

・「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>十市<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>田<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>六斗俵」

120×19×5 032

南北溝〇〇四〇九〇

東西溝〇〇四一一八〇

(7) 「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>六人<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>尼麻<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>贊<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>古<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」

138×21×5 031\*

(14) 「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>辛<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>年<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>一連」

・「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」

(8) 「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」  
・「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」  
□□□□□□□□□□□□□□加尼<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>加<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>女

・「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」  
・「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」  
〔物<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>〕五十日」

125×32×3 032

(9) □□□□□□□□□□□□□□

(316)×25×4 081

・「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」  
□□□□

(4)

(15) 「<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」  
〔大家臣<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>加<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>〕

(51)×(11)×3 081

百代五十代  
百代大百代

〔乙里田知不<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>大連公<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>〕

(286)×(48)×5 081

(16) □□米<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>斗<sup>ヲ</sup><sub>ノ</sub>」

(149)×43×3 019

- 東西溝ＳＤ四一八五と南北溝の口一川四七田中流点  
 (17) 「▽田田塙一斗▽」  
 南北溝ＳＤ四一八九  
 (18) •「▽ 上長押釘卅隻之中打合釘一長七十 五丈」  
 •「▽ 『□□□』(削り残り)  
 □村廣人弟国□  
 (19) 正月四日志紀未成  
 □一□□  
 □二□□〔枚カ〕  
 □四枚○」  
 (177)×22×2 061(檜扇)\*
- (20) (124)×20×3 081  
 (21) (148)×11×2 081  
 (22) 「。小柱十九」  
 150×37×4 081
- (1)～(6)は七世紀中葉頃の木簡。(1)は上下両端折れ。古拙を強くと  
 ビめた字体。「女」との対比から、「大人」は正丁を指すとみら  
 れる。(2)は上下一片からなるが、中間を欠く。下片の下端は一次的  
 削り。下片の四文字目はウ冠が確認でき、「家」の可能性がある。  
 (3)は完形の物品整理用の付札。裏面は一次的な墨書。(4)は各辺を面  
 取りした小型直方体に刻書する。(5)は墨書が薄く、検討を要する。  
 (6)は大型材を用い、文字も巨大で、呪符のような趣もある。  
 (7)以下は各種遺構から出土するが、木簡自体は七世紀後半である  
 う。(7)は完形の贊荷札。贊の荷札は通常、物品・数量以外は、貢進  
 地名のみを記すが、本木簡では人名のみを記載する。調と贊の類似  
 性を示す史料として重要。(8)は上下一片接続で、上下両端折れ。(9)  
 は三片接続。上下両端折れ、左右両辺割れ。上部は「五十代」など  
 代制とみられる地積を墨書し、下部は歴名を刻書する。歴名には  
 「以蛭マ」「乙里」という珍しいウジ名がみえる。「石上大連」も八  
 色の改姓以前の可能性があるだけに議論を呼び。〔10〕は記録筒を二  
 次的整形したもの。三片接続で、下端折れ、左辺割れ。「沙弥」と  
 の対応から、上は「僧」と書かれていたと推定される。読経や法会  
 に参集する僧・沙弥の人数を書き上げたものであろう。(11)は下端折  
 れ、左辺割れの習書木簡。「椋」は七世紀に一般的なクラの表記。  
 (12)は荷札木簡の下端部を二次的に整形して尖らせる。本来は尾張国  
 の荷札か。二文字目から下は表面が削り取られている。(13)はほぼ完  
 形の養米荷札。一文字目は「少」の可能性もある。二文字目は旁が  
 「鳥」の字体。(14)は完形の鰯荷札。「辛巳年」は天武一〇年(六八

二)。物品・数量を記した後に地名を書くのは珍しい。(15)は荷札に由来するとみられるが、上端以外は欠損する。(16)は二片接続で、上端折れ。下部には穿孔がある。(17)は完形荷札。塩を貢進することから、「田田」は後の紀伊国名草郡多田郷に該当するか。サト名の次に「五十戸」「里」を省略している。(18)は完形だが、裏面の墨書きは削り残り。「五丈」は上長押の長さで、割書きにはそれを組み立てる際に使用する釘の種類と本数を記す。付札状を呈した進上状で、地方からの貢進荷札ではない。(19)は上端折れ、下端二次的切断。「弟」は「廣人」の出身地とみられ、後の山城国乙訓郡に該当しよう。

一文字目は下部が「木」の字体で、「集」と訛読できれば、「物集國」は「廣人」の出身地とみられ、後の山城国乙訓郡に該当しよう。

村」の可能性がある。(20)は上端折れで、材の下部に日付と人名を記す。(21)は三枚をとじ合わせた檜扇の破片(上部欠損)で、最も外側の一枚に墨書きする。(22)は上端部の左右二箇所に径約5mmの小孔があり、その下に墨書きする。番付に関わるか。

## 9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』(二〇〇八年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一一(二〇〇八年)

(市  
大樹)



(桜井・吉野山)

北限・北域の土地利用状況は不明瞭な部分が多いが、  
銅滓や銅製品、鞴羽口、板ガラス片、墨書き土器などが  
出土しており、工房や雑舎

## 奈良・安倍寺跡

1 所在地	奈良県桜井市安倍木材団地
2 調査期間	第二〇次調査 二〇〇六年(平18)八月~九月
3 発掘機関	桜井市教育委員会
4 調査担当者	木場佳子
5 遺跡の種類	寺院跡
6 遺跡の年代	飛鳥時代~中世
7 遺跡及び木簡出土遺構の概要	安倍寺は七世紀中頃に創建されたと考えられる古代寺院で、「東大寺要録」などから、阿倍氏の氏寺として建立されたと推定されている。発掘調査によつて主要素藍及び寺域の西限はほぼ確定し、南・東限についてもその概略を捉えている。

安倍寺は七世紀中頃に創建されたと考えられる古代寺院で、「東大寺要録」などから、阿倍氏の氏寺として建立されたと推定されています。(21)は三枚をとじ合わせた檜扇の破片(上部欠損)で、最も外側の一枚に墨書きする。(22)は上端部の左右二箇所に径約5mmの小孔があり、その下に墨書きする。番付に関わるか。

## 9 関係文献

奈良文化財研究所『奈良文化財研究所紀要二〇〇八』(二〇〇八年)

同『飛鳥・藤原宮発掘調査出土木簡概報』一一(二〇〇八年)

(市  
大樹)

北限・北域の土地利用状況は不明瞭な部分が多いが、  
銅滓や銅製品、鞴羽口、板ガラス片、墨書き土器などが  
出土しており、工房や雑舎